

第 27 号(2010. 7.29 配信)

今年は空前の「印象派イヤー」といわれています。新聞報道の言葉です。印象派の展覧会が相次いで開かれ、関連の特別展が東京、大阪を主に 10 件以上に上るそうで、新聞社の主催、後援が多いからとはいえ、特にブームでもないのに珍しいことです。

そこで今回は、印象派の絵を中心に、関連するアートの話です。

私がまだ二十歳代前半の若造だった頃、同じ仕事場の同僚、というよりむしろ大先輩の美術の先生から、「キミたち美術館に行って感想や批評っぽい話をしているけど、絵とか彫刻は、あぁ綺麗だな、美しいなと素直に感じるのが大切なよ。これから、いろんな作品を数多く見たり聞いたりしているうちに、きっと、好きな絵、いい作品だとキミ自身を感じ入って、これだ、っていうものが分かってくるよ」といわれました。青臭い書生論をたしなめられた思いで、今も心に残る言葉でした。因みに、その方は塚原スガノさん。長年にわたる二科会メンバーの彫刻家です。往時から出品、入賞を重ねて正会員になり、今もご健在で、私たちよりかなり高齢ですが、制作も続けられていると聞いています。

塚原さんのご示唆で「いろんな作品を数多く見たり聞いたり」するうちに、印象派の作品に惹かれるようになりました。素人ながら、印象派愛好者の一人です。なぜでしょうか？ - - ごく自然の道理をいえば、美しさと明るさ、色の組み合わせ、その豊かさを感じるからです。19 世紀後半のパリを拠点に、光と色彩を重視する表現を切り開いた画家たち。彼らの数々の作品に共感して心地よい気分になるから、とあってよいでしょう。

常識的なことですが、印象派の名前の由来は、モネの絵「印象・日の出」です。それを酷評した当時の展覧会評から、そう呼ばれてきたといわれます。19 世紀の後半、印象派登場の時期のフランスでは、絵画の価値を決めるのは官選サロンの審査委員会でしたから。

(中公新書の近刊・吉川節子著『印象派の誕生』を参照ください)

モネといえば、日本人が一番好きな画家だそうです。睡蓮の連作がよく知られています。ルノアールが 2 位でしたっけ。ふくよかな若い女性たちの明るい表現は魅力的です。個人的な好みを記すのは極力控えますが、私はどちらかというと風景画が好きで、モネに限らず、光の広がりと人物、特に働く人、くつろぐ人の姿が見えると、その風景の中に入り込んでみたくなります。ですから、印象派に先立つ「バルビゾン派」のミレーやその先輩コローの絵も好きです。フランス行きの際に、フォンテンブロー散策の途次、バルビゾンに二度も立ち寄り、村の中をよく歩きました。

海外在勤を終えて最初に行ったのが山梨県立美術館でした。ミレーの代表作「種をまく人」を観るために。つい先日でかけた六本木・森ビルでのボストン美術館展でも、印象派モネ、セザンヌ、シスレー等の著名な秀作と合わせ、ミレーの「馬鈴薯植え」を観て満悦感を味わいました。なお、山梨県立美術館では、ミレーの作品「鶏に餌をやる女」「落ち穂拾い(夏)」など他にも数点観られることを付記しておきます。

忘れないうちに記すと、英国の印象派ターナーと、彼に続くコンスタブルも好きな画家です。特にコンスタブルは、農村の風景に広く光をあて、農民の動きを描き込んでいます。上記のボストン展でも、彼の作品を観ることができました。風景画といえば、印象派セザンヌが、生家から望む「サン・ヴィクトワール山」を季節や時間を選び、同じ作品名で多数描いています。迫力に溢れ、他の追随を許さないと感じます。

ところで、つい5、6年前まで、東京で美術館、絵画展といえば上野の山が中心でした。JR 駅の直ぐ前に、建物を世界遺産にと推される国立近代美術館、広場の向こうに都の美術館、その先に芸大美術館があり、駅の左手には上野の森美術館等々。たまたま都美術館の企画展が大行列だったので早々に後日再訪と決め、回れ右して上野の森美術館で開催中だった「ピカソ・クラシック 1914 - 1925」に入り、青・壮年時代の作品展を観る絶好の機会を得たこともありました。美術館・博物館が集まっていると、こんな体験もできるのだと分かりました。

最近、六本木に国立新美術館、森美術館等々、東京駅の両側に、新たに開館した三菱一号館美術館や、八重洲口から歩くブリジストン美術館等が、隔たりがありながらも徐々に集まってきました。しかも「アートの日」なんて言っていたのに、季節に関わりなく真冬や真夏でも随所で魅力的な企画展が開かれます。「印象派イヤー」で都心の4美術館に出向きましたが、梅雨時から夏場にかけて、蒸し暑さと猛暑のさなかでした。しかも上野はゼロ。4館とも六本木と東京駅地域です。アート鑑賞も、時代の変化に適応しなくては、と痛感しています。

話がちょっとそれますが、私が独身だった幾十年も前に、劇団・民芸が演じた「炎の人 ゴッホ」を観に行った折のこと。滝沢修、宇野重吉など当時の名優が出演し、内容にも演技にも感動しました。劇中、滝沢が扮するゴッホが日本の浮世絵に触れ、「何という美しさだ！素晴らしい色彩だ！」と叫ぶのです。当時、私はまだ知識不足で、浮世絵って、瓜実顔で目が極端に細い美人画を連想し、「えっ？色彩は綺麗だけど？」と思いながら、印象派の代表ともいえるゴーギャンやゴッホが浮世絵を褒めちぎるのはなぜか？浮世絵の魅力とは何か？印象派と浮世絵との関わりも、しっかり分かったとは言えませんでした。

以来、特に近年になって、江戸期の歴史、文化や芸術の話聴く機会が増え、NHKTV が毎日曜の朝と夜放映する「日曜美術館」のファンでもあって、今では、浮世絵には北斎や広重に代表される風景画に、その構成・構図、情景描写、色の配合など時代を超えて名作が多いと理解しています。浮世絵は、今でもやる気と条件が揃えば再現不可能ではない日本画の一種、明治、大正期にも作品は続き、あるいは再興の機会さえありました。何年か前に、江戸東京博物館の企画展「北斎」と、その後の「大正時代の浮世絵展」を観て、興味と関心が一層つりました。「やる気と条件」とは、絵師、彫師、刷り師が揃えばであって、実際には不可能に近いと思いますが...

余談は控え、北斎に絞って話をすると、彼が描いた「北斎漫画」は、和紙の綴じ込みで実に1,350巻に上ります。「気の向くままに漫然と描いた画」と彼自身がいうのは、まさに森羅万象、日常の人々のしぐさ、取っ組み合い、道化師の姿態、鳥・獣の所作など、実に多様多面にわたります。「漫画」発祥のいわれと、多彩な面白さに驚嘆したものです。彼が活動した90年間は印象派に先行しますが、その影響力が印象派の作品に及んだ可能性は充分考えられます。ゴーギャンの作品に、「北斎漫画」の力士の取り組みを参考にして人々が描かれ、過日観た「マネとモダン・パリ展」(三菱一号館)のマネの小品「肉屋での行列」で傘を差し合った人々の列は、「北斎漫画」の一部そのものでした。美術評論家の河野元昭氏(東大名誉教授)が出席し、北斎をめぐる6、7月に放映された「新・日曜美術館」を聴くと、北斎と浮世絵の画や色彩が、印象派の作品にさまざまな刺激と影響を与えた話が具体的に示され語られ、前述・ゴッホ役の滝沢修の叫びを懐かしく思い起こすことになりました。

さて、「印象派イヤー」の展覧会に話を戻します。東京の4企画展のうち、7月下旬までに3館が終わり、なお開催中は、国立新美術館(六本木)の「オルセー美術館展」(8月16日まで)だけです。「ポスト印象派展」とも呼ばれ、主催社の新聞によれば、ポストとは「後期」ではなく、印象派の活躍を受けて19世紀末に花開いた独創的な絵画表現だそうです。自画像や肖像画が比較的に多く、人物に目を向けているといわれます。

絵画展を観る際は、受付で音声ガイドを借りることをお勧めします。著名な絵であれ、初めて見る絵であればなおのこと、私たちはその道の専門家ではありませんから、耳から入る解説・情報は有益、有効です。一人 500 円均一。絵画展を楽しむには効果大ありです。会場には、展示画ごとに数行の説明が掲示されていますが、文字が小さく混んでいて読みにくい。耳元で自分だけ聴ける音声ガイドは、掲示に記されていない情報やエピソードまで話してくれるし、聴きそびれたら再現できます。「マネとモダン・パリ展」では、掲示には個々の制作年だけで解説はなく、音声ガイドはいわば必需品。しかも解説とは別に、随時、村治香織がナビゲートする音楽演奏も聴けてサービス抜群でした。

もう一つ守ってほしい注意点。友人同士で観て歩く場合、大声で話したり笑ったりは厳禁。静かに観て回ること。音楽会と同様のエチケットです。私は、家内や友人と同行しても、関心と興味が異なることがあり得ますから、中間の場所か出口で出会う時間を決めて、別々に観て歩きます。展覧会の内容や展示数・量にもよるけれど、出口まで、最短 50 分、最長 1 時間 20 分もあればよいのでは。それらは経験と関心度で計るほかありませんが。

冒頭の塚原さんの言葉も参考に、いろいろなアートを数多く見たりきいたり楽しんで、心の糧を豊かに積み上げていってください。

時に、今日は大暑、真夏の盛り。末筆になりましたが、この際に、暑中お見舞い申し上げます。熱中症にはくれぐれもご注意のうえ、お元気で夏場を乗り切ってください。

(7月23日大暑記。国際サブロー)